

# CEPAツールキットの思想に基づく環境学の授業の構成とその実践

— 江戸川大学「環境と教育」「環境と倫理」における実践例

吉永 明弘\*

## 1. はじめに

2012年から、江戸川大学で環境学に関する授業（「環境と教育」および「環境と倫理」）を行っている。そこでは教壇から一方的に講義をするのではなく、さまざまな工夫を凝らしている。その大きなヒントとなったのが、生物多様性に関する「CEPA ツールキット」と、近年マイケル・サンデルの講義などで話題を集めている「対話型講義」である。本稿では、主に「CEPA ツールキット」をふまえた授業スケジュールを紹介する。そしてその流れの中に、対話型講義を位置づけ、それらによって、環境学の授業が有意義なものになることを示してみたい。

## 2. 「CEPA ツールキット」における確実なコミュニケーションのための工夫

「CEPA ツールキット」は、生物多様性条約（CBD）事務局によって、生物多様性という言葉とその中身を確実に普及させるために製作されたもので、現在 WEB 上で公開されている（<http://www.cepatoolkit.org/>）。CEPA とは、Communication, Education and Public Awareness（コミュニケーション、教育、普及啓発）の頭文字で、そのツールキットとは、生物多様性の普及啓発の

ためのマニュアル、心構え、ヒント集のようなものである。

例えば、情報を発信する際には、その目的を明確にすることが必要であるという。つまり、聞き手に「知識」を与えたいのか、聞き手の「態度」を変えたいのか、それとも聞き手に何らかの「行動」を起こしてもらいたいのか、その違いに応じて情報発信のしかたは違ってくるだろう、というのが CEPA ツールキットの考え方である。

また、情報をただ伝えればよいというものでもない。CEPA ツールキットによれば、「言ったことは、必ずしも聞かれたとは限らない」であり、「聞かれたことは、必ずしも理解されたとは限らない」。また「理解されたことは、必ずしも同意されたとは限らない」。さらに「同意されたことは、必ずしも行動に結びつくとは限らない」。最後に「行動に結びついたことも、繰り返し行われるとは限らない」のである。授業であれセミナーであれ、情報発信の時には、ここまで肝に銘じておくべきということなのだ。

それらと同様に、学習の定着度についても、興味深いヒントが提供されている。それによると、講義によって定着するのは5%にすぎず、読書をさせると10%、視聴覚教材を用いると20%、実例を見てもらうと30%、グループディスカッションを行うと50%、自分でやってみると75%、他人に教えると90%定着するという。講義によって定着するのは5%というのは衝撃的な数字である。このパーセンテージの根拠はひとまず措く

2013年11月28日受付

\* 江戸川大学 現代社会学科専任講師 環境倫理学

として、とにかく講義だけでなく、それ以外のものもすべて取り入れて授業を組み立てることが重要と考え、江戸川大学の「環境と教育」ならびに「環境と倫理」において実践してみた。以下に具体的に紹介する。

### 3. 「環境と教育」における実践例

#### (1) 講義と読書 (lecture, reading)

「環境と教育」の授業の初回は、ガイダンスとして、自己紹介、授業の概要の説明、諸連絡を行った。そのあと2回ほど、環境教育の理論的な話と、言葉の説明などを板書で行った（これが「講義」）。そこで参考文献表（本稿末尾の「配布資料」を参照）を配り、その中からどれか1冊を学期末の試験日まで読んでくるよう指示した（これが「読書」）。読んだ本の感想を書くことを、試験の1問目に設定することで、きちんと読んできたかどうかのチェックを行った。自分で選んだ本はきちんと読んでくるもので、ほとんどの学生が十分な感想を書いていた。

さらに、生物多様性に関するマンガ（日本自然保護協会の道家哲平さんたちと共同製作したもの）を配って感想レポートを書かせた。「マンガなので分かりやすい」という感想が多かった。授業では、マンガをきっかけにして、生物多様性条約の中身だけでなく、さまざまな条約や議定書の中身についても話を広げていった。

#### (2) 視聴覚教材 (audiovisual)

次に、パワーポイントを使った講義を行った。理論的な話の復習をした後で、旅先の写真などを交えて具体的な事例の話をした。例えば、白川郷（岐阜県）と妻籠（長野県）の観光のあり方について、軽井沢の「自然」について、八ツ場ダム問題について、栄村（長野県）の風土について、戸定亭（松戸市）や松ヶ丘商店街七夕祭（流山市）といった近所の見どころの紹介、ソウル市の清溪川復元によるまちづくりと真鶴町（神奈川県）の「美の条例」によるまちづくりの比較など。そのうえで、自分たちで旅行をしてさまざまな地域の

現場を見ること、あるいは旅行に行かなくても、近所の風景に目を止めて地域の特徴を観察するよう、学生たちに促した。

そのあと、しばらく映像作品の視聴を行った。『プロジェクト X 挑戦者たち——チェルノブイリの傷 奇跡のメス』と『エリン・プロコビッチ』の2本で、どちらも以前から学生にたいへん評判のよい作品である。授業では、作品に登場する菅谷昭とエリン・プロコビッチという対照的な2人の道徳的英雄（モラルヒーロー）の比較を行った。

菅谷昭は、世界的な甲状腺ガンの権威であり、信州大学医学部の助教授として忙しく働いていたが、チェルノブイリ事故の後に白血病が増えているという話を聞き、それなら甲状腺ガンも増えているはずだと考え、大学助教授の職を辞し、ベラルーシに行き無給で働いた<sup>1</sup>。他方、エリン・プロコビッチは、無職で貯金もなく、3人の子供を育てるために、雇用と昇給のために法律事務所で働いていたが、その中で六価クロム汚染による健康被害問題にのめりこみ、大企業を相手に戦い、被害者たちのために全米史上最高額の和解金（3億3000万ドル）を勝ち取った。ボランティアというと、菅谷のような無給での献身的な働きをイメージしがちだが、実際にはボランティアも、それが組織化され社会的に承認されたものといえるNGO/NPOも、自分たちが生活するための資金を確保することが必要である。菅谷は社会的地位、専門家としての技能、給料の貯蓄分があったために、一時的に無給で働くことができたが、彼をモデルにしてしまうと、非専門家である市民は、ボランティアに対する敷居が高くなってしまおう。それに対して、エリン・プロコビッチは、映画を面白くするためもあるだろうが、二言目にはお金がほしいと口にする。これを見るとボランティア精神とは程遠いように思えるが、しかし結果的に彼女は、献身的な努力の末、被害者たちを経済的・精神的に救うのである<sup>2</sup>。

それぞれについて感想レポートを課したところ、単なる感想だけではなく、独自の考察や調査を交えた、質の高いものが多く提出された。インターネットで菅谷やエリンのその後の様子を調べ

てくる人もいた。このように、写真や映画などの「視聴覚教材」を用いた授業は、教育効果が高いといえる（前述のマンガは読書と視聴覚教材の中間にあたるだろう）。

### (3) 実例を見てもらう (demonstration)

次に、外部講師を招聘し、活動紹介や野外実習を行っていただいた（これが「実例を見てもらう」）。2012年、2013年は日本自然保護協会（NACS-J）から福田博一さんと小林今日子さんをお呼びした<sup>3</sup>。加えて2013年は千葉県職員の上田正佳さんにご講演いただいた<sup>4</sup>。

福田さんには野外に出て大学のキャンパス内で、落葉に生息する生きものを発見するなど、植物とその生息環境の関係に気づかせる自然観察会をしていただいた。普段こうした外での授業はほとんどないので新鮮な体験だったと思われる。小林さんには、室内で、袋に入った自然物の正体を触感だけで当てるというクイズ等を行っていただいた。学生たちにはこのようなクイズは初めてだったと思われ、みな楽しんでた。

石渡さんの講演は、産業廃棄物の不法投棄の流れや業界の構造について、廃棄物の価格について、東日本大震災のがれき処理について、環境学の用語解説など、多岐にわたる充実した内容だった。学生は特に石渡さん自身が撮影した被災地のがれきの写真に見入っていた。こうした現場で活動している人の話を聞くことも大事である。

この間に、秘密基地体験や自然体験についてのレポートを課した。ボランティアや調査研究活動をしたことがなくても、「自分たちだけの居場所づくり」の経験は多くの人がしている。今の若い学生でも、「秘密基地」と言うとうすぐに通じるし、多くの人が子どものころを思い出して楽しんで書いてくれる。もちろん、秘密基地の体験がない、あるいは記憶がうすいという学生もいるので、その人たちには自然体験について書いてもらった。興味深いことに、自然体験を選んだ人の多くは、田舎や旅行先での体験について書くことが多い。他方、秘密基地についてのレポートは、地域（農村か都市か）を問わず、子どものころに住んでい

た場所での経験を書いてくることが多い。「自然体験」は田舎や旅行先でするもの、という先入観があるのだろうか。近所にも自然はあり、見たりふれたりすることもあるだろうが、それを自然体験とは位置づけないということだろうか。

### (4) グループディスカッション (group discussion)

最後に、「アメニティマップづくり」を行ってもらった。アメニティマップとは、自分が好きな場所（アメニティ）と問題を感じる場所（ディスアメニティ）とが色分けで示された地図のことである<sup>5</sup>。好きな場所には緑色、問題を感じる場所には赤色、微妙な場所には黄色のシールを貼る。白地図を用意してそこにシールを貼り、コメントを書き込むというやり方もあるが、慣れている通学路やキャンパス内のアメニティマップをつくる場合には、模造紙に手書きの地図を自分で書いたほうが、特色あるマップができて良い。

この作業の目的は、身近な環境を見直し、良いと評価できるところは維持する方法を探り、悪いと評価したところは改善の方法を考えることで、地域環境の保全を具体的に考えてもらうことにある。またその際には、一人ではなく、いくつかのグループをつくって、グループごとに話し合いながらつくることが大切である。環境に対する自分の評価を絶対視するのではなく、他者の評価との共通点と相違点を確認し、お互いに「良い」または「悪い」と考える理由を明確にすることになるからである。

また、アメニティマップづくりを行うことで、異なる学年、学科の人たちとも話をする機会が生まれた。できればここに、地域の住民が参加するともっと有意義なものになるだろう。学生は地域の歴史や文化について知るだろうし、地域の住民は学生の意識や考えを知ることができるだろうから（これが「グループディスカッション」）。

### (5) 自分でやってみる (practice by doing)

そうして完成したアメニティマップをもとに、プレゼンテーションをしてもらう（「自分でやってみる」）。講師がコメントするだけでなく、学生

からの質問も促した。終了後、マップとプレゼンテーションの出来について、学生による投票を行い、最優秀のグループには表彰・加点を行った。マップの出来もさることながら、プレゼンテーションの出来にばらつきがあり、効果的なプレゼンテーションを行ったグループに対しては、学生の評価も高かった。

#### (6) 他人に教える (teaching others)

学期末の試験では、1問目が上述の「本の感想」、2問目は「この授業内容を、この授業を受けていない人にきちんと説明すること」と設定した（これが「他人に教える」）。これは授業にきちんと参加していないと書けない設問である。またこの授業でいったい何を学んだのかを自覚化させることにもなる。このようにして、15回のスケジュールの中で、先に挙げた項目を順番にとりあげる。ここまでやれば、授業内容が5%しか伝わらないという事態は防げるだろう。

### 4. 「環境と倫理」における実践例 ——対話型講義

「環境と倫理」では、NHKで放送された『ハーバード白熱教室』（2010）で話題となった、政治哲学者マイケル・サンデル教授の「対話型講義」のやり方を踏襲している<sup>6</sup>。対話型講義では、教員が一方的に解説をするのではなく、学生がマイクを持って意見を述べ、それに教員が応答する形で授業が進められていく。「環境と倫理」では、毎回、授業の前半部分で議論する題材を提供する。そのあとで受講者（毎年15人程度）にマイクを向けて、意見を言ってもらう。その際に、教員の意見を最初から言わないことと、学生のどんな意見でも頭ごなしに否定しないで、それに対する学生側の賛成意見、反対意見を待つことを心がけた。

議論の題材として、NHKで放送された『プロジェクトX 挑戦者たち』のDVDを用いた。このシリーズの中から、阪神大震災後の復旧作業、汚染に対するボランティアの活動、トキの繁殖、動物園の取り組み、文化財修復、まちづくりとい

った、環境倫理に関係する題材を選んで、学生に視聴してもらった<sup>7</sup>。環境倫理にどう関係するかを、トキの繁殖を例に挙げて説明する。ここにはトキ個体の保護とトキという種の保存、トキの住める環境（生息地域）の保全という問題が重なり合って存在する。環境倫理学には“個体主義か全体論か”という意見対立があるが、そのことを理論的に説明する前に、トキ繁殖という事例を見ることによって、問題を具体的につかむことができる。そのあとで、DVDの感想とともに、種を絶滅から守ることの意味について意見を述べてもらった。

2012年度は、江戸川大学の学園祭（駒木祭）で授業を公開した。社会学部現代社会学科と駒木会の共催で「福・幸・志・縁」を合言葉にしたイベントを行った。その中で、復興支援をテーマに、「公開白熱教室『環境と倫理』いま私たちにできること～3・11を風化させないために～」を実施した。

環境倫理と復興支援とは、一見異なるテーマのように思われるかもしれない。環境倫理は主に人間と自然とのかかわり方を問題にしてきたからである。しかし、そもそも環境倫理とは、「環境」に関する人間の活動がどうあるべきかを問うものである。環境とは、主体（人間）をめぐるものである。したがって、人間の環境としての被災地の復興支援はどうあるべきかについても、環境倫理のテーマとなる。ここでは議論のために、3つの問いを立てた。①「がれき処理」は現地で行うべきか、広域処理を行うべきか、②元の姿に戻すべきか（復旧）、新しくデザインしなおすべきか（復興）、③被災地から遠く離れた私たちに何ができるのか、ボランティアは何をすべきなのか。これらについて、駒木祭という場で、学内の教員や、学外の方々も参加する中で、学生たちが堂々と自分の意見を述べていたのを見て頼もしく感じた。また、教員からも多くの刺激的な発言が飛び出し、活発な議論の場となった<sup>8</sup>。

このような対話型講義には、学習定着度を向上させるためのさまざまな手法を組み込むことがで

きる。対話に入る前の情報提供は、講義形式で行ってもよいし、事前に本を読んでもらってもよい(サンデルはこの形式)。また「環境と倫理」では映像を見せることにしたが、このような視聴覚教材も有効である。あるいは野外実習やマップづくりをやった後に、対話型講義をやるのも効果的であろう。対話型講義にはグループディスカッションの要素もあるし、自分でやってみる、そして他人に教える、という要素もある。対話型講義はCEPAの考え方と連動させることで、その効用に一つの根拠が与えられ、また手法の幅が広がるだろう。また、CEPAの考え方からすると、対話型講義は有効な情報伝達・意識啓発の手段として評価されることだろう<sup>9</sup>。

## 5. おわりに

以上、江戸川大学の「環境と教育」と「環境と倫理」で行っている授業のやり方を示した。もちろん、これは一つのやり方であって、CEPA ツールキットや対話型講義の考え方を活かした多様なやり方が考えられるだろう。それぞれの教員が受講生の特性に合わせて、そして自分の特性に合わせて、授業を組み立てていくのが望ましいだろう。CEPA ツールキットによれば、効果的なプレゼンテーションを行うためには、聴衆を知ること、発表者自身を知ることが大切なのである。

## 謝 辞

外部講師として授業の一端を担ってくださった日本自然保護協会の福田博一さん、小林今日子さん、千葉県職員の石渡正佳さん、駒木祭での「福・幸・志・縁」イベントを企画された現代社会学科の親泊素子教授、恵小百合教授(当時)、土屋薫准教授をはじめとする先生方に感謝申し上げます。

## 《注》

- 菅谷は帰国後、長野県の衛生部長に就任し、2004年から松本市長を務めている(2012年に3選を果たし現職)。2011年3月11日以降の福島第一原発事故の際には、テレビに出演し、放射能の影響についてコメントしていた。2011年7月には、菅谷の著書の「新版」が刊行された。そこには福島第一原発事故についての菅谷のコメントが追加されている(菅谷2011)。
- 映画では省略されているが、この訴訟のための調査の過程で、エリンも病気になっている。お金の話が多い

ので、人によっては、「結局は金のためではないか」という感想を抱くかもしれないが、それでは説明のつけない奮闘がここにはある。

- 日本自然保護協会(NACS-J)は、尾瀬を電源開発のためのダム建設から守るために1949年に結成された「尾瀬保存期成同盟」を母体とする団体で、日本の自然保護団体としては古株であり、かつ最大規模の団体の一つである。現在の主な活動は、調べる(自然および自然保護の調査研究)、守る(自然保護の活動と政策提言)、広める(自然保護の普及啓発、環境教育の実践)である(財団法人日本自然保護協会2002、ホームページ<http://www.nacsj.or.jp/>も参照)。
- 石渡さんは産廃Gメンとして産業廃棄物の不法投棄を摘発し、銚子市の不法投棄をゼロにしたことで有名になった。著書では、不法投棄の流れや業界の構造が鮮やかに解明されている(石渡2002、石渡2005)。
- アメニティマップのつくり方の詳細については、考案者の齋藤伊久太郎の説明を参照(齋藤2007)。
- 近年では、ハーバード白熱教室の解説を務めた小林正弥教授をはじめとして、日本でも「対話型講義」を行う教員が増えている(小林2012、宇佐美2011)。
- 視聴した『プロジェクトX 挑戦者たち』のタイトルとその内容は以下の通り。「よみがえれ、日本海」(ナホカ号原油流出事故後のボランティアの活躍を描く)、「鉄道分断 突貫作戦 奇跡の74日間」(阪神大震災後の復旧作業の様子を描く)、「幸せの鳥トキ 執念の誕生」(佐渡島のトキ繁殖の奮闘を描く)、「旭山動物園 ペンギン翔ぶ ～閉園からの復活～」(旭山動物園の取り組みを描く)、「桂離宮 職人魂ここにあり」(桂離宮修復の職人技を描く)、「湯布院 癒しの里の百年戦争」(大規模開発ではない地域づくりの姿を描く)。
- のちに、教員の発言に対して「やっぱり先生方の発言は(自分たちとは)違う」と言っていた学生がいた。これも一つの教育効果である。
- また、「環境と倫理」の授業では、1回分を大学キャンパスとその周辺のごみ拾いにあてている。流山市のクリーン・ボランティア「まちをきれいに志隊」に登録し、流山市の支援を受けている活動でもある。

## 参考文献

- 石渡正佳(2002)『産廃コネクション——産廃Gメンが告発!不法投棄ビジネスの真相』WAVE出版
- 石渡正佳(2005)『産廃ビジネスの経営学』ちくま新書
- 宇佐美誠(2011)『その先の正義論——宇佐美教授の白熱教室』武田ランダムハウスジャパン
- 小林正弥(2012)『対話型講義 原発と正義』光文社新書
- 財団法人日本自然保護協会(2002)『自然保護NGO 半世紀のあゆみ——日本自然保護協会五〇年誌』平凡社
- 齋藤伊久太郎(2007)『アメニティマップづくり』『アメニティ研究』No.7・8合併号、日本アメニティ研究所
- 菅谷昭(2011)『新版 チェルノブイリ診療記——福島原発事故への黙示』新潮文庫

### (配布資料) 環境学の基本文献 80 冊

最初に、レイチェル・カーソン (1974) 『沈黙の春』新潮文庫、有吉佐和子 (1979) 『複合汚染』新潮文庫、および石牟礼道子 (2004) 『苦界浄土——わが水俣病』講談社文庫を挙げておく。この 3 冊は環境問題研究における古典として位置付けられている。

#### < 地球環境問題 6 冊 >

地球環境問題を読み解くには、以下の本が参考になる。ビル・マッキベン (1990) 『自然の終焉——環境破壊の現在と近未来』河出書房新社は、悲観的なトーンが気になるが、地球環境の危機を豊富なデータに基づいて訴えている点で一読の価値がある。米本昌平 (1994) 『地球環境問題とは何か』岩波新書は、国際政治における地球環境問題の位置を的確に分析している。坂口洋一 (1997) 『増補版 地球環境保護の法戦略』青木書店は、環境問題に関する重要な条約や法律を概観する上でとても役立つ。山村恒年 (1998) 『環境 NGO——その活動・理念と課題』信山社は、環境問題における NGO の役割と意義を考える上で参考になる。河宮信郎 (1995) 『必然の選択——地球環境と工業社会』海鳴社では、具体的なデータに基づいた明快な現状分析がなされている。特に「能率」と「効率」の違いについての考察が興味深い。ウルリヒ・ベック (1998) 『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局は、リスクという観点から現代の環境問題を分析した名著である。

#### < 南北問題 5 冊 >

地球環境問題は南北問題でもある。そのことを知るために、鶴見良行 (1982) 『バナナと日本人——フィリピン農園と食卓とのあいだ』岩波新書、村井吉敬 (1988) 『エビと日本人』岩波新書をあわせて読むとよい。F.E. シューマッハ (1986) 『スモール・イズ・ビューティフル——人間中心の経済学』講談社学術文庫は「スモール・イズ・ビューティフル (小さいことは美しい)」という主張ではなく、「適正技術」を推奨したものであるとして読まれるべきである。近年の環境政治思想の中で、アンドリュウ・ドブソン (2006) 『シチズンシップと環境』日本経済評論社は、エコロジカル・フットプリントを根拠にして、途上国に対する先進国の責任を、恩恵ではなく正義の問題として論じている。ヴァンダナ・シヴァ (2002) 『バイオパイラシー——グローバル化による生命と文化の略奪』は、先進国による発展途上国の遺伝資源の強盗という観点から、生物多様性の問題が南北問題であることを明確に示している。

#### < ローカルな環境論 7 冊 >

「ローカルな環境論」に位置づけられる本として、環境社会学の「生活環境主義」の立場からの論集である鳥越皓之編 (1989) 『環境問題の社会理論——生活環境主義の立場から』お茶の水書房と、水辺での暮らし方に着目し、環境教育への示唆もある嘉田由紀子 (2001) 『水辺ぐらしの環境学——琵琶湖と世界の湖から』昭和堂がある。また「流域」に自覚的に住むことを提唱した本として、養老孟司・岸由二 (2009) 『環境を知るとはということか——流域思考のすすめ』PHP サイエンス・ワールド新書をすすめる。文化人類学では、クリフォード・ギアツ (1999) 『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』岩波書店、森林学では、井上真 (1995) 『焼畑と熱帯林——カリマンタンの伝統的焼畑システムの変容』弘文堂が重要な本である。イヴ

ァン・イリイチ (2005) 『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』岩波書店は、ヴァナキュラーな領域を抽出した名著である。また、ローカルな環境政治を考えるきっかけになる本として、今井一 (2000) 『住民投票——観客民主主義を超えて』岩波新書を挙げておく。

#### < 法・政策・経済 7 冊 >

環境法の基本的な考え方を学ぶには、北村喜宣 (2006) 『プレップ 環境法』弘文堂が便利である。また環境政策については、倉阪秀史 (2008) 『環境政策論 第二版』信山社が行き届いた解説をしている。環境と経済については、諸富徹 (2003) 『思考のフロンティア 環境』岩波書店をすすめたい。これは「社会的共通資本」や「社会関係資本」まで射程に入れた有意義な本である。宇沢弘文 (1974) 『自動車の社会的費用』岩波新書は、既存の経済学を批判した本でもあり、「社会的共通資本」の基本的な考え方を提示した本である。従来の経済学を批判しながら、環境保全と経済発展の両立を目指した本として、倉阪秀史 (2002) 『環境を守るほど経済も発展する——ゴミを出さずにサービスを売る経済学』朝日選書がすすめられる。同じく経済学批判の本として興味深いものに、中村修 (1995) 『なぜ経済学は自然を無限ととらえたか』日本経済評論社がある。また「エントロピー」と「コモンズ」をキーワードに、新しい経済学を提案している本として、植田敦ほか (1995) 『循環の経済学——持続可能な社会の条件』学陽書房がある。

#### < 資源エネルギー、廃棄物問題 4 冊 >

資源・廃棄物に関する物理学的知識を最も簡単に紹介した本として、広瀬立成 (2007) 『物理学者、ゴミと闘う』講談社現代新書がある。近年、リサイクルなどの環境保全キャンペーンについての批判本・論評本が多いが、その中で読まれるべきは、植田敦 (1999) 『増補・改訂新版』環境保護運動はどこが間違っているのか?』宝島社文庫、熊本一規 (1999) 『ゴミ行政はどこが間違っているのか?』合同出版の 2 冊であろう。また、石渡正佳 (2002) 『産廃コネクション』WAVE 出版は産廃業界の構造やその実態に迫った貴重な文献である。

#### < 自然保護 12 冊 >

日本の自然保護運動については、石川徹也 (2001) 『日本の自然保護——尾瀬から白保、そして 21 世紀へ』平凡社新書、および加藤則芳 (2000) 『日本の国立公園』平凡社新書がわかりやすくガイドしてくれる。また、井原俊一 (1997) 『日本の美林』岩波新書は、日本の森林と林業政策を知る上で欠かせない本である。自然保護の理念や手法を知るには、沼田真 (1994) 『自然保護という思想』岩波新書、鷲谷いづみ (2001) 『生態系を蘇らせる』NHK ブックス、吉田正人 (2007) 『自然保護——その生態学と社会学』地人書房、および宮脇昭 (2007) 『鎮守の森』新潮文庫を読むのがよい。一志治夫 (2006) 『魂の森を行け——3000 万本の木を植えた男』新潮文庫は、生態学者宮脇昭の植樹活動と、その波乱万丈の人生を描いている。

従来の自然保護思想に再考をせまるものとして、田中淳夫 (2003) 『里山再生』洋泉社新書 y が示唆に富む。及川敬貴 (2010) 『生物多様性というロジック——環境法の静かな革命』勁草書房は、「生物多様性」概念が自然保護を超えてさまざまな法や政策に影響を与えているロジックだということを明らかにしている。

アメリカの自然保護運動については、岡島成行 (1990) 『アメリカの環境保護運動』岩波新書が最もコンパクトにまとまっている。川端裕人 (2000) 『緑のマンハッタン—「環境」をめぐるニューヨーク生活』文藝春秋には、アメリカの環境保全運動や動物の権利運動が生き生きと描かれている。

#### <動物の地位・肉食5冊>

動物の福利や権利に関連する本として、以下をすすめる。川端裕人 (2006) 『動物園にできること——種の方舟のゆくえ』文春文庫は、自然保護に関する動物園の役割や、動物園における「環境エンリッチメント」を知る上で最上の本である。テンプル・グランディン (2011) 『動物が幸せを感じるとき——新しい動物行動学でわかるアニマル・マインド』NHK出版は、動物にとって何が幸せなことなのかを知りたい人の必読書である。塚本学 (1993) 『生類をめぐる政治——元禄のフォークロア』平凡社ライブラリーは、江戸時代における動物の位置づけを知る上で興味深い。また、肉食文化の特徴を描きだした鯖田豊之 (1966) 『肉食の思想——ヨーロッパ精神の再発見』中公新書も一読の価値がある。鎌田慧 (1998) 『ドキュメント 屠場』岩波新書は、肉食に不可欠な屠殺の現場を描いており、この事実もきちんと知っておくべきである。

#### <環境史・文明批評7冊>

環境史では、石弘之ほか (2001) 『環境と文明の世界史——人類史 20 万年の興亡を環境史から学ぶ』洋泉社 y 新書、および J.R. マクニール (2011) 『20 世紀環境史』名古屋大学出版会が豊富な情報を与えてくれる。

環境問題を現代文明の問題としてより広い視野から論じているものとして、立花隆 (1984) 『文明の逆説——危機の時代の人間研究』講談社文庫、および養老孟司 (2003) 『いちばん大事なこと——養老教授の環境論』集英社新書が興味深い。一方、ツイアビ (1981) 『パパラギ——はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』立風書房は、痛烈な西洋近代文明批評として話題を呼んだが、批判も受けている。ある種の反面教師として読むこともできる本である。その他、現代文明についての包括的な批評として、見田宗介 (1996) 『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書、および手塚治虫 (1996) 『ガラスの地球を救え——二十一世紀の君たちへ』光文社知恵の森文庫を挙げておく。

#### <環境教育・意識啓発4冊>

広義の環境教育・意識啓発に関して参考になる本として、デイヴィッド・ソベル (2009) 『足もとの自然から始めよう——子どもを自然嫌いにしたくない親と教師のために』日経 BP 社がすすめられる。この本は、現在の環境問題キャンペーンの陥穽を鋭く突き、より前向きな提案を行っている。「自発的簡素」については、鈴木孝夫 (1999) 『人にはどれだけの物があつたらぬか——ミニマム生活のすすめ』中公

文庫、福岡伸一 (2006) 『ロハスの思考』木楽舎ソフトコト新書、および辻信一 (2004) 『スロー・イズ・ビューティフル——遅さとしての文化』平凡社ライブラリーが、親しみやすい形で書かれている。

#### <原子力問題10冊>

原子力発電のしくみと基本的な問題については、山田克哉 (2004) 『核兵器のしくみ』講談社現代新書、および田中三彦 (1990) 『原発はなぜ危険か——元設計技師の証言』岩波新書、高木仁三郎 (2000) 『原子力神話からの解放——日本を滅ぼす九つの呪縛』カッパブックスをおさえておきたい。原発の立地の不正義を問題にしたものとして、広瀬隆 (1986) 『東京に原発を』集英社文庫が有名である。チェルノブイリ原発事故については、七沢潔 (1996) 『原発事故を問う——チェルノブイリから、もんじゅへ』岩波新書および菅谷昭 (2011) 『新版 チェルノブイリ診療記——福島原発事故への黙示』新潮文庫が参考になる。日本の原子力事故を考えるにあたっては、1999 年の JCO 臨界事故の際に出された高木仁三郎 (2000) 『原発事故はなぜくりかえすのか』岩波新書および岡本浩一 (2001) 『無責任の構造——モラルハザードへの知的戦略』PHP 新書、NHK「東海村臨界事故」取材班 (2006) 『朽ちていった命——被曝治療 83 日間の記録』新潮文庫を読むことを勧める。また、原子力に関する科学者の責任を論じたものとして、唐木順三 (1980) 『科学者の社会的責任』についての覚書』筑摩書房が必読書である。

#### <ブックレット10冊>

ブックレットは、少ない分量で環境問題の現状を伝えてくれるので、入門としては最適である。『長良川から見たニッポン』、『ほろびゆくブナの森』、『市民農園のすすめ』、『飲み水が危ない』などは、国内の問題を知る入口になるだろう。『破壊される熱帯林』、『誰のための援助』、『戦争って、環境問題と関係ないと思ってた』は、国際的または地球規模の問題を考える上で参考になる。食の安全に関しては、『生命と食』が有益な議論を行っている。『原発と日本の未来』は、原発のコストを問題にしている。また伝記として『レイチェル・カーソン』をおすすめする。

※その他、本や研究者を探す場合に、アエラムック (1994, 1999, 2005) 『環境学がわかる』朝日新聞社が参考になる。マンガでは、『風の谷のナウシカ』、『寄生獣』、『藤子・F・不二雄短編集』、『幻想世界への旅』、『美味しんぼ』が考えさせられる。映画では、有名なゴアの『不都合な真実』だけでなく、『ブタがいた教室』、『エリン・プロコピッチ』、『犬と猫と人間と』、『ベイフォワード』、『クレヨンしんちゃん 嵐をよぶモーレツ! オトナ帝国の逆襲』をすすめる。

※※この文献表は配布時から若干の更新がなされている。これは 2013 年 12 月時点の文献表である。